



イペアンロー! (いただきます)

今日はチポロ（スジコ）入りのおかゆをごしょうかいします。
魚のことをアイヌ語で「チェッ」といい、とくにサケをさす場合は、シベ（ほんとうの・食べ物）や、カムイチェッ（神の魚）と呼んだりもします。サケは、それほどアイヌにとって大事で身近な食べ物です。
身は塩焼きにしたり、オハウ（スープ）にしたり、ルイペ（さしみ）で食べます。大量にとれたら、身を開き、干して保存しました。
チポロは、スジコやタラコなどの魚卵のこと。半にえにしてつぶしたサケのチ



カンピシ(本)



このまんがは「食べものに困らないように」という願いをこめて「ハルコロ（たべものを持つ）」と名づけられた女の子が、こいをして、結婚して子どもを産み、その子どもが成長して旅立つまでが物語の中心です。
舞台は1400年ごろのこと。日本の室町時代ですが、ハルコロは日本の文化とははつきりとちがうアイヌ文化の中を生きています。それを絵にするのに、作者はたくさんのことを調べたはず。ハルコロの心の動きも、ていねいにえがかれています。
ハルコロが物語のなかで「私の青春」と言う場面があります。「青春」は日本語の辞書に「希望を持ち、理想にあこがれ、異性をもとめはじめる時期」とあり、これまでのアイヌの物語には、あまりあてはめることのなかった言葉でしょう。
でも、このまんがではアイヌの少女の

「チポロサヨ」 スジコのおかゆ 秋のぐちそう

ポロを、ゆでたジャガイモやシト（だんご）に、からめて食べました。秋だけの特別なごちそうですね。
サヨ（おかゆ）もよく食べた料理で、たくさんの種類があります。山菜、キノコ、豆、海藻などを具にします。昔はビヤパ（ヒエ）をよく使ったようです。ビヤパは、サヨのほか、ごはんのようにいたり、お酒の原料にもしました。
あたたかいビヤパサヨは甘味があってとてもおいしい！ ヒエは自然食品のお店などで売られています。

チポロサヨ（スジコ入りのおかゆ）
◇材料（作りやすい分量）
ヒエ（米でもよいし、米とヒエを合わせてもよい） 1合
水 1～1.5ℓ
スジコ（しょうゆや塩など、好みの味付けのもの） 適量

◇作り方
①ヒエは目の細かいザルでよく洗い、水とともになべに入れ、中火～弱火で煮る。水分が減ってきたら水を少しずつ加え、よく煮る。
②やわらかく煮えたら、スジコを加えてできあがり。昔は、おかゆと一緒に生のスジコをにこんで作りましたが、スジコはにるとコチコチにかたくなります。

ハルコロ(1)、(2)

石坂啓・まんが 本多勝一・原作 萱野茂・監修

口から、この言葉が自然と出ていて、とてもすてきです。孫はおばあちゃんにあまえ、お姉ちゃんも妹にちょっといばっている。人の心の動きは、民族がちがっても同じ。作者がそこに立って、このまんがをえがいているのがわかります。

(2021年、岩波現代文庫 各1430円)



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

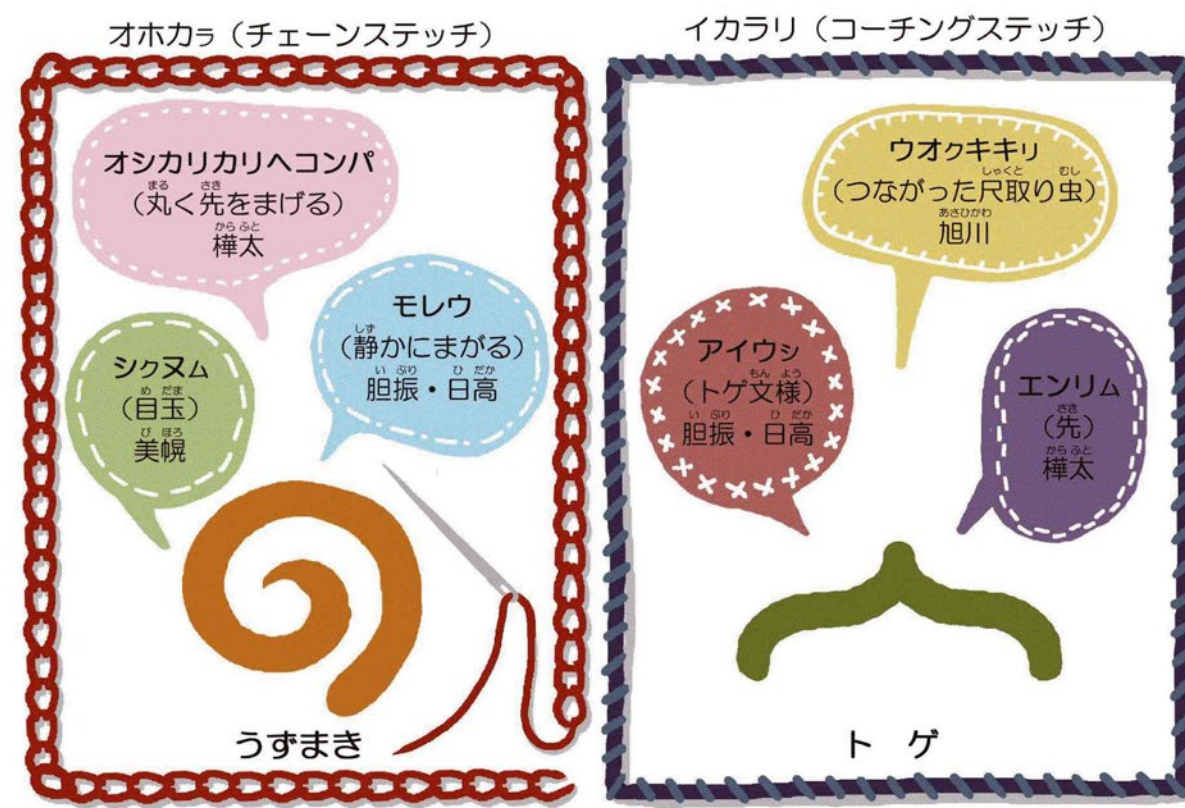
アイヌ文様は北海道遺産（歴史や文化、産業などのなかから道民がえらんだ「未来に伝えたいもの」）の一つです。針と糸でぬったり、植物を編んだり織ったり、刃物で木をほったり、また画材やコンピューターを使ったりと、いろいろな方法でつくられる文様です。

江戸時代から明治ごろまでのアイヌ文様は、花や木の葉の文様もありますが、あまりはつきりと物の形をかかないところが特徴です。まっすぐな線とカーブした線を組み合わせて、着物の道具の形に合うように文様を考えます。

文様は晴れ着など特別なものにつけるといふ人もいます。一方で、名寄市や旭川市、釧路管内白糠町など北海道の北や東の方では、山に仕事に行くときの着物にも文様をつけました。アイヌ民族の考え方では、山は山の神様の世界だとされます。ですから、そこに行くときには立派な身なりをととのえた方がよいのだといえます。

ところで、北海道遺産のアイヌ文様は、北海道以外の土地でも使われてきました。千島列島や樺太のアイヌ民族がつくった文様は、同じアイヌ文様でも北海道の文様とは少し雰囲気がちがいます。そして、樺太のウイльта民族、ニヴ民族、そこから海をわたってアムール川という大きな川の流域に暮らすさまざまな民族の文様も、アイヌ文様と少しずつ似ています。和人文化にも、よく似た文様があります。た

つくり方や考え方がいろいろ アイヌ文様 未来に伝える



例えば、日本で「網目文」とよばれる文様は、アイヌ民族の着物や木ぼりにもよく見られます。これと同じ文様が、敦煌（中国）の1300年ほど前の壁画にも使われています。和太鼓などにかかっている「ともえ」の文様は、アイヌ

文様のほか、沖縄や韓国、そしてイギリスの古代文化の文様にも見られます。良いデザインは人から人へ伝わって、いろいろな地域で楽しまれてきたのですね。

きょうの目とば

ししゅうの文様

着物の文様は、色のちがう布の組み合わせや、針と糸によるししゅうでできています。着物の布の上に、色のちがう布を切りぬいたり、折りまげたりしながらぬいつけると、きれいな文様になります。布が重なった部分はじょうぶにもなります。

ししゅうには、小さな輪をつなげたようなオホカラ（チェーンステッチ）と、1本の糸を別の糸でおさえるようにぬうイカラリ（コーチングステッチ）がよく使われます。モンゴルのノイン・ウラ遺跡で見つかった2千年ほど前のカーペットには、チェーンステッチでうずまき文様がししゅうしてありました。ししゅうにも長い歴史があることがわかりますね。

「うずまき」と「トゲ」?

アイヌ文様は「うずまき」と「トゲ」の組み合わせだといわれることがあります。胆振地方や日高地方のアイヌ語では、うずまき文様を「モレウ」とよび、「静かにまがる」という意味だと言われています。オホーツク管内美幌町では、「シクヌム（目玉）」とよび、樺太では「オシカリカリヘコンパ（丸く先をまげる）」とよびます。
トゲ文様は、胆振・日高では「アイウシ」とよびます。トゲ文様にもいろいろなよびかたがあり、樺太では「エンリム（先）」、旭川市では「ウオクキキリ（つながった尺取り虫）」とよびます。地域ごとの言葉・文化を知るのも面白いですね。